

2023(令和5)年6月2日

中京山岳会 市橋隆文

読図講習会開催の意義と今後の課題について

私は、1999年(平成11年)に45歳で趣味の一つに登山を加え、来年で丁度25年の節目を迎えますが、これまで600回近く実施した山行中、単独登山での道迷いが二度ありました。

最初は、鈴鹿の黒谷での崖の伝い歩きに至った事例、二度目は、雨乞岳山中から御在所岳の御岳神社裏手に辿り着いた事例で、いずれも山行に慣れてきた頃の恥ずかしい経験です。特に、60歳の時に中京山岳会に入会する迄は、地図やコンパスも殆ど携帯せず、勝手気ままに決めた山域の隅々まで制覇することを楽しんでいました。

その様な私が今回、読図講習会に参加する契機となったのは、新会員が増える中、実力不足の私が岳連の理事に祭り上げられたことと、最近、会員による道迷いと山行中の急病(痙攣)事案が発生したからです。そして、山岳会が「安全登山第一」を旨とする組織である以上、登山に不可欠な心身や技術の能力向上は当然のことですが、今回の講習会参加者全員が実感した様に、読図能力が技術だけではなく、登山を純粋に楽しむために必要な要素であると考えたからです。

ところで、昨今のコロナ禍で、登山の傾向も変化しています。「経験が1年未満の初心者の増加」と「遠くの高山から近くの低山へという行先の変化」というもので、それに伴い遭難も増えています。通常は、午後3時迄の下山を考えて登山計画を立てますが、午後になってから登山を開始する人が増え、しかも、登山に関する知識や体力の不足に加え、十分な飲料水や食料、必要な資機材も携行していないのでは、遭難が増えるのも必至です。特に、単独登山は、安全管理の判断を1人ですするため、遭難した際には発見や救助が遅れるリスクが高くなります。

日本山岳・スポーツクライミング協会からは、安全登山の資料が公開されていますし、愛知岳連の様に、読図講習会などの活動を積極的に行っている組織もあります。私もこの機会に、山岳会の在り方や存在意義について、改めて考えてみる必要があると感じ、「5—20—100の理論」に倣って早速、中京山岳会でも読図講習会を企画することとしました。

最後になりましたが、北村理事長や岩瀬副理事長、河合講師を始め関係者の皆様には、大変お世話になり、ありがとうございました。また、皆様と山行体験が語り合える様に、私も精進します。